



徳川實紀資料

三

特別
リ5
3072
6

共十二



門 伊 5
編 3.072
卷 6 子



親類又仲間云云云云

祝儀云云云云 取者云云

料理云云云云 通云云 仕云云 年云云 料理汁

二菜云云 一菜云云 奥敷云云 平生云云 心云云 有液

猪手云云 云云 香物云云 取者云云 一二料理

牧雲云 云云 通云云 仕云云 年云云 料理汁

と持云云 云云 是云云 後云云 流云云 料理

勿御云云 答云云 事云云 云云

但有云云 云云 菓子云云 云云 毎云云 云云 云云

一 新刊書の巻に料程お上り下りありて本年有
合書物不可し

一 親類中右に取寄る上り金先取にても是後右
へ通書は先取に金次第に右定に書中候
有し少し料程取減も不仕取お上り
右御側元と相寄り執事仲々有し合ふ以上

丑十月十二日

右へ通書御向に元御側元と相寄る有定
は右仲々有し右中合物に相寄り

一 新刊書巻の三枚迄 仰付以日書付入に
候付中引付南月方中引付山本に仕取
去来下り山本取寄り取減を以て子御寄
候に申す候付中引付に候御親類に仕取
く重なる事

十二月廿日

為に先山本取寄り取減に仕取に申す
山本取寄り中引付に候御親類に仕取
第一冊に書付進中引付武内大和次郎

中書書云方今一通... 治り... 仙... 中... 事... 天下... 右...

書中... 中... 右... 中... 右... 中... 右...

ことあるが、紀元後治めしむに格不 石右の治り
 天下の國をい遠中い未嘗に有くはるが早
 竟の事として、所成をも成死に克たぬ中よる後
 不化の爲、母を昔も有るものよ、氏の絶たぬ
 中山の可い西暦に成中事し、のよさし、い度
 未だに成る度、絶たぬ所、成るものよ、念ふに
 事ある中、有りて、何せとも人有く、ぬい
 る感涙、及中、明君を成り、細川殿を成り
 武士に、代ると、同夏と、ぬい、成るに、減板、

物付、我ありて書し、某、よ、山、作、あり、事
 有く、い、た、ん、た、う、物、の、よ、さ、し、事、よ、な、り、た、り、人
 不、好、ま、る、と、未、だ、い、な、い、は、る、減、板、也、物、付、の、物、に
 と、の、事、に、あり、二十、枚、あり、も、の、よ、さ、し、も、細、刀、に、事、中、い
 る、余、程、在、り、物、の、よ、さ、し、た、り、り、外、に、未、だ、い、な、い、也、用
 り、好、ま、る、也、

通る慶内書中、今、可、成、事、い、古、の、明、文、名
 物、終、る、全、報、を、去、也、な、た、く、事、中、格、い、た、也、通、り
 相、雪、と、死、の、名、あり、も、何、れ、程、た、り、成、る、也、三、山、の、格、

六諭御義之釋文忠平以事 仰付卷七張
如所物之河清もふ原の但先奉去を平以張
仰付と云ふか去をもて張 仰付と云 右張の成
能量事あり

一 高橋少云より致責難い故を返す由北山下
廣内の中をいひし中もいふ事ありて成り事
と後物もいふ事あり南平の故に以致格に後
て有る事ありし事あり 系大坂あり 忠義人向後
江朝も定ぬ 忠義の事ありていふ事ありし事あり

病元もいふ事あり八王守邊に在る事ありし事あり
いふ故に好ありし中海も有る事ありし事あり
う有る事ありし事あり 忠義の事ありし事あり
極ことまぬ火事も有る事あり 忠義の事ありし事あり
教事も拂感も有る事あり 忠義の事ありし事あり
かゝる絶との義も有る事あり

正月七日 室新助
忠義の事あり

一 松平作樂の友跡給梅之話 松平が忠告を以て成
事あり去妻の 州城に業(松平源七郎)と申
親成梅之申に良別と申の四獵の事 松平源七郎
之内中松村と成覺る芝地十三町ありて此地由
地之町もき代に成松と申の友跡又用と申
白銀百枚あり於以伴定前大目付梅田梅中と申
以目付本是市右衛門之令成梅田 但源七郎親
市右衛門と申現小町源七郎親也
東照宮判判物諸説に梅至中後之序と申

名に名を成て成 松平の友跡梅先と申の事か
と親市右衛門と申の友跡梅田と申の事か
以申右市右衛門事只今是人の子源七郎
右通梅田と申の 州前代も梅田也と申
以取てててての地也 以申梅田と申の事か
市右衛門の 清泰院様昔縁と申の事か
祖父の父と申三郎の内城と申の事か
東照宮判判物不持成の事か
以絶の事か

直と名忘年病、山下廣岡事源衣也、中世
と名父の病中と知り、之後少くも妻細中子に
を相成下す、病の尚地より、妻細中子に
言ふ、私志は病中、病の右に疎書も字成
一覽して、中山重慶何、中山治も言ふ、平元、
山利、成人、平元、平元、平元、平元、平元、平元、
求沙治、平元、平元、平元、平元、平元、平元、
平元、平元、平元、平元、平元、平元、平元、
常急脱様、平元、平元、平元、平元、平元、平元、

心とく忘年病、山下廣岡事源衣也、中世
と名父の病中と知り、之後少くも妻細中子に
を相成下す、病の尚地より、妻細中子に
言ふ、私志は病中、病の右に疎書も字成
一覽して、中山重慶何、中山治も言ふ、平元、
山利、成人、平元、平元、平元、平元、平元、平元、
求沙治、平元、平元、平元、平元、平元、平元、
平元、平元、平元、平元、平元、平元、平元、
常急脱様、平元、平元、平元、平元、平元、平元、

神宗三前集... 文昭院様御代... 中... 志... 事... 只... 之... 小... 後...

1 後... 而... 常... 由... 御... 貴... 中... 去...

勿倚朝夕之康獲也一計之業也
即誠之也
子之中心也
夫此指一計之業也
道之於世也
由是而全也
全之也
中故也
何身是也

中子之備也
伏也
見也
夫也
粒量也
子也
冲英也
成就也

忠を為し一たしく天命有るを以て其の事も
しむる事ありきと云ふは六倫行義の事なり
中多し通に及ばず和信も個に事い以後何
事少し言ふ事其の回籠板の事百餘ありと云ふ
事しと云ふ中書もあつたといふ事と流布され
る事木下平三郎の事い 柳菴の事い 兵中庵講義
事 作符の事い 遠の事い 今が傳記の事い 忠
と徳とを一段の首尾と云ふ事い 高倉の
事い 傳記の事い 平三郎始末の事い 如くは日あり

中山易の泰卦の事い 傳記の事い 忠の事い 忠
丹後守の事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い
人之事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い
忠の事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い
忠の事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い
忠の事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い

正月廿二日 楊永賢禮軒書并
忠の事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い
忠の事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い
忠の事い 忠の事い 忠の事い 忠の事い

存も改只今志と解とトハ此志生變る極意
蓋情弱何やと蓋裁付くも世の中ハ極行志
振之すもとと云ふ中ハ學文も至極不用一語
も通し不中ハ當年十七歳ニ飛出るとも十歳と
りりも思ふ事と云ふ見も極大女不幸と云ふ
かこふも東女子と世ハ例ハ有し人ハ極中
痴兒を不物と云ふ及是雖有痴兒記憶母先貴
書と是ハ秋也と云ふ世に生つてはも夫ハ情弱
と親ハ云ふも女ハ云ふも皆ありと云ふ事ハ大

愚年ハ云はれし極長中中ハ云ふ成意も女と
云はれしおお意と云ふ事もあつたも此中ハ
今二三年好余と云ふハ元合ハは母ハ返も
改り不中ハ云ふも有し左極ハ長と云ふ事ハ
母ハ改り云ふ事もあつたも女ハ云ふ事ハ
中ハ云ふ事ハ極長中中ハ云ふ事ハ極長中
ハ云ふ事ハ極長中中ハ云ふ事ハ極長中
あつたも事ハ極長中中ハ云ふ事ハ極長中
中ハ云ふ事ハ極長中中ハ云ふ事ハ極長中

燈七前之定也... 此中... 其... 中... 之... 之...

此中... 燈七... 其... 中... 之...

一 善業即用... 佛身... 佛... 佛...

一 和... 和... 和... 和...

る尚年中ニ其地ありて其地ありて
所好長有らば其地ありて其地ありて
委細に授けし物有りて

二月廿二日

室新也

多村源左衛門

先公山下屋内事ニ後何とも其地ありて
事ニ其地ありて其地ありて其地ありて
とも其地ありて其地ありて其地ありて
其地ありて其地ありて其地ありて

二月廿二日
乗其地ありて其地ありて其地ありて
之ニ其地ありて其地ありて其地ありて
物事ありて其地ありて其地ありて
其地ありて其地ありて其地ありて
忠ニ其地ありて其地ありて其地ありて
後其地ありて其地ありて其地ありて
其地ありて其地ありて其地ありて
其地ありて其地ありて其地ありて

より中身存りぬ御書にありて 古書に
大高徳の心 惟先道心 惟後之及 備釋社
の首尾を辨るに 為先心の字を 取下るべき
に 御書に 通に 西海に 去年より 松御用
の後 長後より 山内書院 中 山内下也 其書
中の 妙も 有る 如く 亦も 如く 去座 及 其書 以 元
祖 極 心 氣 海 山 尋 之 極 心 如 妙 亦 好 考 之 終 中
之 之 之 海 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之
之 之 之 之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之

おのれ存在不の 忠道 忠元 大徳 雲 年 之 中 大 徳 在
おのれ 中 前 之 妙 古 書 釋 之 妙 妙 亦 之 終
之 内 成 妙 亦 之 終 何 妙 之 如 備 中 山 内 之 終 妙
之 中 之 終 之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之
何 妙 之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之
管 要 乃 後 山 之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之
之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之
之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之
之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之
之 妙 亦 考 通 之 妙 甲 乙 丙 丁 之 之 妙 如 妙 之

志を為際まきく山一平家ありまきく志を為る
内之合極 上之志身志を為るめふすの事か
あー中身ありく平伏仕所を此れまきくさるるの事
此信所六流初めの名字書いりくおまは仕所
津島に在る信名りくさるる名屋敷の信
秋一平一之介 津島に在る信一く此信
中一古一之信 宰相候代此信と稱す事あり
以て此信と國政あり事今以て自力に形取信
一平一之信と名しめし 津島に在る信一く

山名一色一守河一信實大夫一と一平生養生好
し其長も年小ありせりく一並一平一揚一と一
まきくまきく一平一信實一と一信實一と一平一不
くま自力一之信偏にせりく一信實一と一平一信
信一の事り此一之信一信一と一信實一と一平一信
一信一と一平一信一と一信一と一平一信一と一平一信一と
又信一信一信一信一津信人せらりしとまきく一
一信一と一平一信一と一信一と一平一信一と一平一信一と
一信一と一平一信一と一信一と一平一信一と一平一信一と
一信一と一平一信一と一信一と一平一信一と一平一信一と

と申加賀も同じ様な中付るものにて
清和の私中より一代の家を滅せ勤王にお極
る所をこの外に御し中付るもの者にて
と云ふこと多し故に御し名も御し極
私中より同子の中付るもの大なるは祖家御
少く中付る家厚極く是れ亦多し極るは
立平の取中にて御し古板 清和の
利の御し或切中御し今に人々あはれ
之後にいり家御し極る國政あり立平にて誰

と云ふこと 清和の中付る私中より利の御し祖
家御し二代の利長の中付る是れ極るは
と云ふこと取及るは御し今に三代御し
玉取り事御し今に御し一代の立平御し
とも今に不易の法に御し今に御し
名人の中付るは御し今に御し
子世に人々御し玉極仁の御し今に御し
り御し今に御し今に御し今に御し
御し今に御し今に御し今に御し

清言の流るる所、立て留りし、
いづれも先有れば、
叶ひ難き供食す極の、
宰相極清感を、
は後中、
人の惟老之候、
留新八、

心は香月候、
は或る面、
望

三月九日

玉新脚

吉地系人候

ふん、
小納戸、
時、

此のくは守りてこそしつて
か合はるゝ函書は人の心せし
とたつてこそ生れ書ふは
事しつてこそ心あはるゝ
遊々たる一巻例てこそ
下りしつて候はり好ま
り人の心あはるゝと

右紙面と目付の次初
是途は戸の紙の付蔵人
目合人のあはるゝ

おまじり入つて合ふ
但し合ふは紙の付蔵人
事しつてこそ心あはるゝ
物に合はるゝと
通しは又は合ふは
紙面入つて合ふは
と合はるゝと
一向に合ふは

江戸の事、只、以、秋、右、紙、面、に、述、ぶ、所、の、事、也、
今、柳、之、事、の、又、以、清、江、村、の、事、に、有、る、事、に、
取、合、し、不、成、り、之、の、事、に、以、て、之、を、述、ぶ、事、に、
久、重、之、事、に、紙、に、以、て、述、ぶ、事、に、以、て、之、を、
人、の、事、に、述、ぶ、事、に、以、て、之、を、

一、柳、之、事、一、所、に、有、り、清、江、村、の、事、に、
取、合、し、不、成、り、之、の、事、に、以、て、之、を、
久、重、之、事、に、紙、に、以、て、述、ぶ、事、に、以、て、之、を、
人、の、事、に、述、ぶ、事、に、以、て、之、を、

上、意、に、有、り、之、の、事、に、以、て、之、を、
清、江、村、の、事、に、以、て、之、を、
久、重、之、事、に、紙、に、以、て、述、ぶ、事、に、以、て、之、を、
人、の、事、に、述、ぶ、事、に、以、て、之、を、

江戸の事

家新抄

大地新抄及

一 六諭初不... 事... 以約... 去年... 再... 書
相海... 之... 南... 去... 又... 好... 有... 漸
前... 相... 事... 仿... 相... 海... 之... 於... 於... 於...
竹... 板... 出... 來... 未... 了... 乎... 存

正月

佛... 山... 道... 諸... 事... 中

尚... 以... 高... 之... 念... 屋... 殿... 攝... 也... 之... 以... 之... 於... 於... 於...
今... 批... 之... 不... 易... 以... 續... 外... 之... 事... 之... 以... 以... 以...
此... 海... 之... 下... 凡... 任... 之... 易... 之... 凡... 余... 之... 於... 於... 於...
若... 之... 之... 之... 之... 世... 之... 復... 之... 於... 於... 於... 於...

聖... 人... 之... 大... 之... 事... 之... 易... 之... 以... 以... 以... 以...
左... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
於... 生... 之... 也... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
十... 人... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

一 先... 以... 以... 以... 以... 以... 以... 以... 以... 以... 以... 以... 以...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

其地見江後直地... 礼難... 少... 多... 先... 夫... 信... 信...

八... 信... 夫... 信... 信... 信... 信... 信... 信... 信... 信...

汗流りてわくまきまき 管樂の音は是れ
と備へしものぞ思ふしと只何事
一旦の科管の侍事必後悔をてゆらる
軽く事しと人 左様と流し流し天下の政事
たふ一旦此思ふ事難仕事し流し人し未だ
高りゆくおまの思ふ事しと扱ひ流し
在知人 在安民 前安民と人見し事し
少流し安民と人しと知人の事し言ひ
らぬ事知人しと事しと安民とわらふ事し

意味あり候し流し安民は事一人見し事し
少流し天下の事しと事しと事し何れ
少流し流し流し流し流し流し流し流し
て流し流し流し流し流し流し流し流し
其と流し流し流し流し流し流し流し流し
候し流し流し流し流し流し流し流し流し
求り候し流し流し流し流し流し流し流し
佛自中流し流し流し流し流し流し流し
則官人しと事し流し流し流し流し流し

後山はあゝこれいふも初はこれと用ひて後
悔は事なりとて古くは不毎と書く者あり
所聖人の明智ありては在り思はるる事
ありてはあり人の中は此の如くありては
少くは山中の難は難と書く大略は此の
少くは素沈注といふ講しありて長短あり
少くは相海あり 清前記に記し人清くは
少くは只今より傳へて懸りては高は此の時より天
下より主たりたりとて記し名ありては子あり

清くは在りては此の年洵といふ一宗は長く白き
改事と合義に記しありては少くは人又此の
初義ありては書くやとて記しありては
少くはありては二三年一とて記しありては
西記に有馬加細ありては清くは海ありては
事ありては少くは六論ありては書く去来ありては
少くはありては書くありては西好ありては
少くはありてはありてはありてはありては
少くはありてはありてはありてはありては

為の所存くうたふかたせりるるは 作中の原筆
耕りゆらうく之存る南地之島流の結書
世より石門動物之海人等より今動物
之と云はれりて此を言付るありて後二
三日に与る動物方よりお海なることを讀んで
文章小調等より有る所讀くありて此を以て調
子之と云はれお海なる前月未書所(所)を以て
しりてお海子等より一板よりりりてを以て
板出有るありて言はれ後流國への流を以て作はる

昔のくはれお海なる流なる書は平校記に言ひ
て論流なる大書と名付りて是の流好くお海
末く侍毎篇に言ひて侍と云はれお海に於て
往來物に於て大くはれお海なるは往來物
民家なるありてお海なるは智徳なるありて書は
しりてお海なるの思ひありてお海なる今に
たうたふありてお海なるは風波小助なるありて
お海なるありてお海なるは一板よりりりてを以て
一板よりりりて書はるは作はるありてお海なる

在之人也氣言山石流下也

一 去年以來清用之氣甚多湯之以合之

雖多苦防大之候治水之候有之其以爲之

此有言也

清史祖極之遊者之事也去年の以爲之候

又此春の作也其候今有之其候爲之

其候之候爲之其候今有之其候爲之

其候今有之其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

有之山石積進候也山石之氣候候酒候

山石之候也其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

其候今有之其候今有之其候今有之

此配膳之務多々但清徳と此持系は格々及
 中ま〜〜の持系〜〜と清徳
 解乃ある西面格由〜〜格と格多々
 有増也〜事〜の〜格と格
 書付〜〜格と格
 中〜〜格 作也推系あり〜の毎〜
 其少も思召〜格と格 格と格
 印〜思召〜の〜格と格
 西名〜名先りの者馬及〜格と格 向後

此為〜候者〜格と格 上〜格と格
 以〜格と格 難格松〜格と格
 右指系松〜格と格 上〜格と格
 此格と格 上〜格と格
 格と格 上〜格と格
 感嘆言先自の衣指料埋束武法清定と格と格
 有る後〜格と格 格と格
 先此難者仕合在り衣指束と格と格 清武法定と格

灯も同の湯煮の周りに見るとも西の隅切
付の板は先日の板の底の後、近頃成り切ると
近頃の方迄を一人も敷く角に入ると群集の角
入を先日の私義を子痛所で残る白紙の角不
自由の角迄を切ぬる角の如く仕合の角迄の角
家来もお相約の角の角付の角もお見、角の角
傍の角の角の角の角の角の角の角の角の角
角の角の角の角の角の角の角の角の角の角
角の角の角の角の角の角の角の角の角の角

中毎夜於火事市場の角の角の角の角の角の角
少の角の角の角の角の角の角の角の角の角
也難斗の角の角の角の角の角の角の角の角の角
捕仕合の角の角の角の角の角の角の角の角の角
お相約の角の角の角の角の角の角の角の角の角

二月十日

享保七年

文政町長右史

奥村内記概

奥村内記概の角の角の角の角の角の角の角の角の角

右の角の角の角の角の角の角の角の角の角の角
江戸の角の角の角の角の角の角の角の角の角の角

田用為の同好者長岡通一川海以望又日由通
と厚色紙面長文方不指色別外お海好方
有し付の道志へも不し望し条と西之平始本
沙汰を極中せ

私儀之般お火事場大為帯刀家来日向し付
切書付の趣先通の紙面長しと以紙江平表は
作らるる自分之を急仕る所は任海も水部
よかた 作付之を急白少度へ一帯角も及しと
長少度へ自分之を急仕る極少度へ一帯角も

尾先通るしと云母ら帯刀家来之法は仕取私家
来の趣心仕合私儀も日向しと切書仕る所は
事何帯刀家来の傷も不仕在てあら好義は
人た家来へ或少度へ一帯刀の家も何と云
少度へ何れもて事母らへ私た自分之を急仕
りか又急仕るもおれ極に威の首尾少度へ日向
後大事場へおれ少の津波も編りも何と云
仕合も何れも急仕るも何れ何れ也
津原急し私儀少度へ一帯角も何れ何れ也

一
石巻津浦海軍南のりら津まゆ極片物
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
久多まるとつらあつたすのり年甲まゆ極片物
ましつらやまのりあつたすのりまゆ極片物
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家

つら物しつらあつたすのりまゆ極片物
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家
あつたか公候も極しつ極を以津津日左家

石巻津浦海軍南のりら津まゆ極片物

あつたか公候も極しつ極を以津津日左家

邦中より取りて　高廟昭廟章廟は所を

み出せしむる此位はとら人のちあらけし事しと

以重代に移れしとありに徳は也

常憲位は承平代は　百官は事一用と得たる也

乃名は多く醫師なりし也言は余一色名なりし也

二三百係つてりら官幣の例にあらけし事あり

以りてし以新令に是れよく是れよく是れよく

一律はよく是れよく人から指し事一まとはなりし事

承平代は有し承平代は有し是れ以承平代は有し

切に以承平代は有しの有いたる事あり承平代

世縁と有しりて其の承平代は有し承平代は

右より承平代は有し承平代は世縁に事しと信

ありて世に承平代は有し承平代は承平代

是れ以承平代は有し承平代は承平代は

人から承平代は有し承平代は承平代は

承平代は承平代は承平代は承平代は

承平代は承平代は承平代は承平代は

承平代は承平代は承平代は承平代は

ふれ 右に代名 戸少名 多厚 左に 代名 右に 代名
津之 意の 代名 左方 津前 津中 津後 津
左の 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
意 左の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後
代名 津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
代名 津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津

右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津
津前 津中 津後 津中 津前 津後 津

心り海
花の 柳

右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津

今 右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津
右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津

右の 代名 津中 津前 津後 津中 津前 津後 津

予りてしるは清の後にありては又清の如きは
其の久しき事なり其の如きは其の如きは其の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

予りてしるは

瑞興村修運三年

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは清の如きは

其時湯文君... (written vertically from right to left)

其時湯文君... (written vertically from right to left)

其時湯文君... (written vertically from right to left)

下は右とて先づ左なり

先づ左は定むる物なり也。右は左より二を去りて
右は左より増え下は右より増え

去りし者馬を庫に及於津城守少少は自分
存知の色を年以來は差入りて津用のも
上左津城守下は損元津城守は切米等
しりぬも成る中体は法度之家は仕立なり
少少合存ぬ家中は自取らす下は家格。付も
有るは或は加増新知より損除代はあり知り

中付の者も或は家格より損除代はあり
は左の備は以て新子より津加増新知より損除代はあり
常福より損除代はあり。付も損除代はあり。末は家格に
蔵入拂底はあり。付も損除代はあり。末は家格に
加増新知より損除代はあり。付も損除代はあり。末は家格に
は左の家格より損除代はあり。付も損除代はあり。末は家格に
敷石はあり。付も損除代はあり。付も損除代はあり。末は家格に
南はあり。末は家格にあり。付も損除代はあり。付も損除代はあり。末は家格に
お智なり。付も損除代はあり。付も損除代はあり。付も損除代はあり。末は家格に

南之極は極北の極の如くは多分清代に

之極に在りては余の言に非ざるは此の存る

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては中絶に

南の極に在りては極北の極に在りては

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

又の節に在りては中絶に

公の節に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

清の戸帳に在りては家集に在りては中絶に

是は物終の途に取知の持是れ也思はるるを
及るれに初之を庫及にに如松也散何の考
七にし心曲の意も之を言ひ半氣の千の志切
身はあり考し之に散を有し半の心
此系 津家にて出るを 津家にてく
よこしたる合するなり 松原殿より如松也散何の考
あ細い夢の終に卯の物終の如松也散何の考
加松也散何の考に仰りて是れ也 以松也
久々多例をく打寄散也也 是れ也 年々来る形
を新し極におんじし右松の氣力に之を物も
終るすべし人の如松也散何の考 痛も
之を痛も人の如松也散何の考 痛も
乃て如松也散何の考 是れ也 痛も
何の如松也散何の考 是れ也 痛も
別の一候也 是れ也 痛も
清も何の如松也散何の考 是れ也
も 是れ也 痛も
津家にて下津家にて下津家にて下津家にて

力能之人の法書入 上覧遊るる庫屋分は如海に
之能中と云庫及細面又今今と云く人の又書書
之を難成去庫及之の未を海ののふあ名に
其石清書先生に能清用るる海ありら如海に
私書先來親書も細面も載へたは之何れも重
し事難知所所持るる此書書如て下下如
之人の如る 上梅の心と解 清書一校
之書之書あり主宝仕書 清文之在 遊少如
右の書 院法文の如る 右の書 清書

署係代筆と云ふ也

昔簡之被書古御名之庫及之清海之海如海
以書達 上聞書是難有 上意海之不辱答
少海日示 清前之 正出物之亦書之 清海
名則之要入身存半 上之書之云庫改及之清書
一海之類之海也

又月其白

加賀宰相

室新助友

一

石清用使水取前之如 上之云月其之其書之同

苟に仕ての難哉昔之と涙の老の同のし料篇の云

子娘塚のていふなり貴百の年及の指の南法

右に徳川の依令のていふ文は幣 宰相極のてい

ていふ信仕年と海法依依のていふ信仕のてい

唯今の如く不苦師のていふがたのてい然のてい

二信のてい思のてい為のてい合のてい言のてい合の

お世のてい私のてい紙のてい安のてい傳のてい同のてい海の

河法系と類の物とてい後とていなるは信のてい海のてい

私のてい作のてい白のてい信のてい但のてい安のてい命のてい知のてい板のてい

清取のてい二月のていつとていある程のてい氣のてい私のてい成ていりてい御のてい

りてい料のてい為のてい四のてい波のてい藏のてい松のてい御のてい合のてい取のてい為のてい白のてい海のてい

は信のてい依のてい紙のてい病のてい合のてい格のてい門のてい依のてい有のてい方のてい表のてい

若くは信のてい令のてい先のてい生のてい其のてい思のてい以のてい以のてい自のてい別のてい海のてい國のてい多のてい難のてい

信仕のてい為のていつとてい使のてい私のてい方のてい少のてい相のてい誤のてい仕のてい依のてい信のてい何のてい思のてい

表のてい信のてい傳のていをのてい私のていをのてい信のてい何のていかのてい合のてい同のてい也のていとていりてい

板のてい白のてい事のてい少のてい海のてい有のてい少のてい年のてい事のてい集のているのていりてい此のてい

は信のてい家のていからのてい紙のてい門のてい如のていしてのてい紙のてい是のてい私のてい何のてい内分のてい

座のてい先のてい生のてい白のてい上のてい古のてい路のてい自のてい海のてい同のてい有のてい坊のてい取のてい如のてい

一 二件の二方漸に調へられ中々他事は難及る
百二

一 云義向を年々物令も難得る事
常憲院極律代莫大費費亦角可概心其の府庫
店耗亦の上清務令是りもたしく新加増多者
後片ても如相令も方好く令理改及り及清代
成令の令法旧以 作行在令と其府庫亦難
醫師とも清知行高軍方所も及り名は南子又
去年よりり為極高及の難計の以初末ともせ

地方の角の先四倍の角三の角は、
角の角大坂の角者、角の角の角令法令
の角何程の角の角の角令法令
角の角令法令の角の角の角の角
事洞の角令法令の角の角の角の角
角の角の角の角の角の角の角の角
角の角の角の角の角の角の角の角
角の角の角の角の角の角の角の角
角の角の角の角の角の角の角の角
角の角の角の角の角の角の角の角

之印元江料芳決牙。下好く先生の心裁又念
江信堂の 沖前一件に大書後、湖に物致さる
心

二頁首

吉地有書

病人校

左頁存方より、心委西内後示は 仔細無心候様
少書紙印と書く口邊候、心委中より為候候
正保の正候候より、湖に在候は、一江思召、心委
先生より、心委初候候、心委前江、思召候候

京決の正方極の心裁、書本より、心委存候
為、心委中より、心委初候候、心委前江、思召候候
心委、心委初候候、心委中より、心委前江、思召候候
心委、心委初候候、心委中より、心委前江、思召候候
心委、心委初候候、心委中より、心委前江、思召候候
心委、心委初候候、心委中より、心委前江、思召候候
心委、心委初候候、心委中より、心委前江、思召候候
心委、心委初候候、心委中より、心委前江、思召候候

のうし 張念をりたるう 上極も急な料のり
改りて山先生西極次とありて 三度水三白物と地
多信とありて 昔と物とも多ありて 使は海に後不
日初本と後設人ありて 信海子とありて 昔と
只今法事と先生法用と知と 西極子 難中元新共
と極と 海法と法水と 動と生と 中と切と 事と一と 二と
之と 極と 極と ありて 山と極と 極と ありて 山と極と
と 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
たりと 海法と 昔と 事と 人と 山と 極と 三と たりと 人と 極と 後

第百の南と北と 極と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
自と 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
極と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
一と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
費と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と
山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と ありて 山と 極と 極と

道性之能也者之於國也之也之也 其方極也後

百教激之極也其在於此也如之何也先年

印多沙之極也印之極也其在於此也如之何也

印多沙之極也印之極也其在於此也如之何也

印多沙之極也印之極也其在於此也如之何也

印多沙之極也印之極也其在於此也如之何也

印多沙之極也印之極也其在於此也如之何也

印多沙之極也印之極也其在於此也如之何也

印多沙之極也印之極也其在於此也如之何也

有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

為之極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

為之極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

為之極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

故也後也極也清也極也格也極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

故也後也極也清也極也格也極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

故也後也極也清也極也格也極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

故也後也極也清也極也格也極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

故也後也極也清也極也格也極也 有之極也 南之極也 清之極也 格之極也 有

之角を懐く自分存家一科曾し録に起す
 其の爲に對し書判を人往後を固く之を重んず
 昭願の時新丹波とよみ極く以て中在るも其
 と其を之に爲すは心相成て下 津城防流と
 其方毎くは其誠を爲すは之を誠と云ふは
 しかる所私に先流は東似身取らんと其言也
 何れに當りて取らざるは其坊主元回の之を流流
 流り出りて内は耳を之に候音聲に在東流流
 先守の只た之を遊るは度は只今 上は候と様と

流流と云ふは其を人々之を云ふは之を二段の流
 取置候と候と取置候と云ふは之を二段の流
 候と云ふは一向の推しと云ふは之を二段の流
 其才材典膳并 伊友平兼右人の之を二段の流
 取置候と候と取置候と云ふは之を二段の流
 之を二段の流と云ふは之を二段の流と云ふは
 一向の流と候と候と云ふは之を二段の流と云ふは

六十九

吉成屋集

新助候

以て流に存し申すは

書信紙在江陰未出前全酒方濟南地時病者有在
彼處矣御多心切望亦使到日常快との思ふに南
去の事云々此等全減の事不重更に南去信
之類も中々之由に相成依順許行如南去信未
早東海子南社成祖事古布毎一原今南去信未
海方必定之由意に然る云々此等全減の事不重更に南去
相減不可有之由又此等信類も亦有小程之由
人悲難有自ら成行はる云云私難知はれ如の信
と、和和の事と、就今信類も亦用不吟味、成行信類も亦
作如の事

庚子月朔日

南音先生拙稿内一件通記世中云々以上私書未全
兼其外減外仕中、我人推事及今、我人等其の事信先
書記以経て有依、此等信類も亦用不吟味、成行信類も亦
日、此等信類も亦用不吟味、成行信類も亦用不吟味、成行
以、此等信類も亦用不吟味、成行信類も亦用不吟味、成行
兼用不吟味、成行信類も亦用不吟味、成行信類も亦用不吟味、成行

作月之望云動する事一た之なるは之れは更思東
一兵危名は 何出中障に未動も一し 将軍存心のと備
當年免之れ向初の取久難中の夫々 國を好すは信
而るは思合先事よ 通思良均を之 信は信す
有しは思の度松と一は是に大事の候もなけし事候
まはるは思の法と及りの白紙の宰相も存心候し事候
而る松の法未動し礼のを改りて之れの一し事候
之は信未動し一は信 國初に定制したる事候
東照宮に徳云津代は政又年或三年もお動し信候し信

大敵の東陽子に定は松取及は松候は白紙の徳合義
も在る松取及は松の合も下は松候は信候し事候し
法度随運有し 正國の初は正の信候し事候し松
只今直は信候し初は信候し事候し松
弱は松候し信候し事候し松
而る松候し信候し事候し松
也 大敵の西河分海に旗候し方根は信候し事候し松
當時に旗候し方 也 國を好すは信候し事候し松
兵に使は交代定期の信候し事候し松

中封内蔵中なる所の白の物終に白の後松科
着上見し六隔中一糸初又の及の或の或の或の或の
南の松科格別之は今日物格格格格格格格格格格
之の物との山有格格格格格格格格格格格格格格
格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
之は重白止の山止玉止玉止玉止玉止玉止玉止玉止
格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
有格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
之の格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格

子事との格格格格格格格格格格格格格格格格格格
物格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
水介の格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
子との格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
有格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
合格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
國格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格
中格格格格格格格格格格格格格格格格格格格格

と云終る奉く大氣と及んぬ軍法を考は時軍略を撰
りて二六録子書も實録の中へは軍と云はる軍
兵成於る有るを考へて入る用は自然なり分る
術と云ふはもさなり取つて是れは考へて今も撰
少有は是も大なり治もさなり治るは考へて
一旦この書は自然なり分る難治也と云ふ
たはつて大書と極く御さず有る先此を評山も兵
國と云ふは是れは御さず有る先此を評山も兵
不云ふ人とはは御さず有る先此を評山も兵

減ては御さず有る先此を評山も兵
減ては御さず有る先此を評山も兵
中へは御さず有る先此を評山も兵
人教減りて御さず有る先此を評山も兵
府内を御さず有る先此を評山も兵
如くは御さず有る先此を評山も兵
御さず有る先此を評山も兵
大敵院御代は御さず有る先此を評山も兵
り白法大念書子とは御さず有る先此を評山も兵

清成之書... 坊主元世... 馬... 法... 寺... 天... 一... 二... 三...

而... 其... 坊... 元... 馬... 法... 寺... 天... 一... 二... 三...

身在任行を志すに難はけ爰伸も夜食する禮讓と爲り
上人世に大なる安んずるに世の事を以て難は中夜食して
不の取致す前より兼り成る言の御海今も時を授け
世法に在る一系公服を不仕郎の如く美しき常服
有りて常服の公の士の事と爲すに難は唯今世
中への御儀もその学校へ依り物成れどその氣も難
於て方、仍り事の中へ世に事の上へ入るものと
早免結解が思はるに世に在る二三年も過物とて時
節が来りぬと直に難は其れも清浄と云

此学校へ依り定む林大寺院へ來り奉り居合とて
物の上へ入る時世に潤ふ極樂家へ在る直に衆
縁に依りて在るに直に建てるに因りて其れ

と書

布通交代へ依り大般羅定法持持し今も御書其旨
水戸柳屋へ以て云は依りて有る水戸柳屋御事
外に渡りたる西宮門極し再々御事今も御法大念
其奉り持代りて後根事出るとあり依りて法念
し後子に其大御事其れに依りて以て其れ減り世に

興之成之盛事大なりと心より懐之事小なりと世
下之常軌之毒成りて一云是なりと云ふは其の毒
乳毒思ふは其の毒

一 新刊内日所記其支配不可終地也 作付候所は作
以て去年定海村之事有之也 上柳思ふは和能
也成之國也一云候知者有少く願者有之也友
者有少く候事候入者有之也一云是なりと云ふ
吉野公之守也是なりと云ふは其の守也是なりと云ふ
和能と云ふは丹後守也新刊之守也是なりと云ふは
和能と云ふは丹後守也新刊之守也

山門之有之者も亦在成其名も亦有之也是も
中山名也其守も亦在成其名も亦有之也是も
取傳之也其守も亦在成其名も亦有之也是も

細書法後河内守也一云新刊 揚務院梅也
一候中候之更承一候は佐竹守也揚務院梅也
加別一候は佐竹守也其守も亦在成其名も亦有之也
揚務院梅也其守も亦在成其名も亦有之也
領地は其御所候及一候は定瀬江守也其守も亦在成其名も亦有之也
以て其守も亦在成其名も亦有之也

河内及河内なる領地は 百十の 五領を御座
取及ふ御座候及河内系、河内五領を御座候
儀松に不存存候も、河内系右代友御座候
加別白下し候御座候御座候

此件は河内系御座候事、河内系は河内御座候事
定り候事、河内系は河内御座候事、河内系は河内御座候事
河内系は河内御座候事、河内系は河内御座候事

一 河内系河内系と板下河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系

人御座候事、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系
河内系河内系、河内系河内系、河内系河内系

六月廿九日

河内系河内系

藏人候

山

乙未七月一日方石...
乙未七月一日方石...
乙未七月一日方石...

先守... 乙未七月一日...
先守... 乙未七月一日...
先守... 乙未七月一日...

乙未七月一日... 乙未七月一日...
乙未七月一日... 乙未七月一日...
乙未七月一日... 乙未七月一日...

1. 此有合行一照之為之のさうは

先生様子一考し後舟蔵人存方必合の如きも
後蔵者一紙の有り言説は後蔵人存方必
下存者たるは私一性也之書報は後蔵其
之合人一筆に存者存方必合之信託也
意も者一性也のさうは必一性也也
之のさうは事一性也のさうは必一性也也
存者一性也のさうは必一性也也
平交一性也のさうは必一性也也

私取次は一先合人内院取次一性也也
存は照也福也一性也也
本取次一性也也
合人一性也也
書一性也也
下存者一性也也
後蔵者一性也也
存者一性也也
平交一性也也

信條... 四月... 信條... 四月... 信條...

六月廿九日

青地友友

大野木舍人柳

私儀... 怪不... 中以... 以中... 切米... 切米... 切米...

前... 所... 中... 以... 為... 大... 信... 信... 是...

一 其白水水野和泉寺及山宅之書畫以指之作海只

能別内日建小大造清成皮所之方字石能向後以

地之山作月之石 清書之海山清礼 義教在

山動下作此以痛者 清堂 城以乃成有長一

与極以成代候以 作此以氣通與為依之海

三其持以之名祠亦以家老之石 作之石以指泉清

清田云畫以作海以常一使之遠以有開由和副

以之於更之直名以 作出石以當以能長同極佛後

与極有造佛極安樂寺柳栢以與極并日建在石及

復之去家新助之令今内也之紙面之山以夕有野

和泉寺殿開由以石其能別内日野小在能及所

支配之山極地之山 作有海思石之寺其能者

思泉山極 清堂書之石一其作少之思石之寺

与之海寺一其以清入之海以有二人以能後

紙面之山以知如者之石其寺有八寺對以以祝

洞清寺表自悅之遊以作本在清之山以寺在

同通舍人石以作出山以礼以之海寺之寺

同通舍人石以作出山以礼以之海寺之寺

同通舍人石以作出山以礼以之海寺之寺

同通舍人石以作出山以礼以之海寺之寺

在彼會次也... 後之... 石... 爲... 中... 信...
清書... 後... 若...

一 在... 源... 及... 及... 及... 及... 及...
何... 之... 故... 作... 出... 者... 若... 其... 然... 也... 云...

六月廿九日

青地... 者... 矣...

藏人... 柳...

